

大僧正本多日生現下著

橘香集

特製皮金文字入美本
金六拾錢
並製クロウズ金文字入
金貳拾錢(郵税四錢)

本書は婦人のため起れる日蓮主義鐵仰地明會のため特に本多大僧正が法華經の要文と尊とを聖訓とを輯めたるものなれば弟子檀那は必ず先づ之を拜讀し修養せざる可らずしかも本書はポケット式にて頗る携帯に便なれば敢て之を薦むる所以也

大僧正本多日生現下講述

法華經講演集

序說
如來壽量品

洋裝美本
正價肆錢
郵税四錢

東京市淺草區北清島町十四番地

發行所 統一團

(振替口座東京二二一九)

統一



第九百九十九號

大僧正小林日至上人講演高田日暢編輯

日蓮 主義 諷誦章講義

定價一圓八十錢
特價一圓五十錢
送料十、二十錢

上等美本菊版背皮金文字三方金
什師眞績寫眞入行文平明總ふりかな

一日蓮主義は日本の靈教にして其正體を講明したるものは本書也。宗學大家たる上人が日蓮主義の蘊奥を開示したるものなればなり
一日蓮主義を眞面目に研鑽せんとするものは必ず本書を熟讀せざるべからず。而して其精神を感受すべき也

一日蓮主義者の爲に信解上の要品として一日も缺く可からざるものと謂ふべく。信行の導師たる上人が畢世唯一の告白なり茲に敢て本書を薦む

東京市淺草區新福井町三番地

發行所 顯本宗學會

播州印南郡西神吉村

關領布所 妙信寺

満足と向上

大僧正本多日生師

南北兩朝正閏辨

海軍大佐 佐藤鐵太郎君

日蓮上人の至情

記

者

日蓮上人云く

抑今の法華經を信ずる人、或は火の如く信ずる人もあり、或は水の如く信ずる人もあり、火の如くと申すは、聽聞する時は熾立つ計り思へ共、遠ざかりぬれば捨る心あり、水の如くと申すは、いづもたえず信ずる也、此はいかなる時も常に退せず問はせ給へば、水の如く信じさせ給へる歟、尊とし尊とし（上野抄）

満足と向上

（相州小田原町妙経寺に於ける講談の大要也）

本多日生師

諸君、人々には種々の希望を有つて居るが、如何にすれば其等を充たす事が出来やうか、我々が眞正の最後の満足を得るには、如何なる方法に依らねばならぬか、また人が生活を送る上は、何等かの光を顯はし、徳を積んで行かんければならぬが、如何にすればそれが完全を得るのであるうか、是は最も重大なる事であつて慎重なる注意を拂ふべき問題であると信する、

元來人間が種々の希望を有つて居ると云ふ事は眞に良いことである、人はこの希望とか慾望とか云ふものが無ければ、殆んど力の抜た様になつて何事も出来るものではない、能く演劇などで失心した様な風をして花道から出て来るが、恰當あんな状態になつて終ふ、假し形はならなくとも精神がそうなつて居れば、寔に價値のないものである、

そこで慾望に就て、最初人の求むるものは、何であるかと云へば、普通は本能の慾である。人が生れると直ぐ口をわいて乳を求め、小さい時分には何をやつても、直ぐ口へ持つて行く。これは、物を食ふと云ふ慾望である。大きくなつても、無論珍らしひ物を食はふ。甘い物を食べやうと云ふ慾望は少しも止まなぬ。これも一概に悪い事ではないが、人間がたゞ食ふと云ふ事だけでは意義がない。眞につまらんものである、次には睡眠慾である。これも非常につよい慾で、一旦寝ぶくなると、慾も徳もなくなる。これは或る時間を経過すれば、如何なる英雄如何なる大學者であつても起らざるを得ない。それ故人は安心して寝るために、生き且つ働くものであると云ふ考を持つて居た人もある位であります。それから續いて起るものは男女の性慾である。これも如何なる人でも、免るゝ事の出来ない慾望で、一概に悪い事ではないが、人間が、たゞそれだけでは犬や猫も同じものであると思はなければならぬ。人の目的が、たゞ金錢を貯める

事で。其結果立派な別荘でも建て、其の中で甘い物を食ひ。猫や犬と同じ様な事をして一生を終るものならば。眞に、人に生れた甲斐がない。そう云ふ事だけしか考へぬ人ならば。それはたゞ動物的の生活のみをすすめる人である。と云つて差支なからう。それから、今少し慾望が進んで来れば。世の中で名譽を博しやう。人の信用を得やう。名を後代に傳へやうと。云ふ様な考に進んで来るのである。斯様な慾望は無論結構でもあり。必要でもあり。人として、勤めて行かなければならぬ事であるが。さう云う、人生の慾望は限りのないもので。どこまで行つても。決してもう充分だと云ふ満足を得らるゝものではない。たとへば、學問について考へて見ても。小學校から中學大學と進み。學士になり、博士になつても。其の先きは眞に無限である。又米國の大統領であつたルーズベルド氏について考へて見ても。彼が大統領だけでは。まだ充分でない。と云ふ所から。一つ獅子がりをして。世界の人々を驚かしてやらんと云ふ様なもので。

に捨てられなば、夜の中に、はだかになるべき身をかざらんが爲に。いとまを入れ。衣を重ねんとはげむ。命終りなば、三日の内に、水となつて流れ。塵となつて、地にまじはり。煙となつて、天に登り。跡も見えず成りぬべき身を養はんとして、多くの財をたくはふ、と仰せられた。この果敢ない我である。この我れしか認めないものには。決して大なる満足は得られない。然るに宗教の信仰に依つて充ざるゝ我れは。永久不滅の我である。この實在の基礎の上に立ち。麗はしひ信仰の妙味に浴せんければ。人として、價値の甚だ少ないものである。この境界に至れば、如何なる人でも、八才の龍女の述べ様な、歡喜の狀態に、何時でも満されて居ることが出来る。實にこの信仰を味識した場合には。決して、少しの不平も、淋びしひ感も、起るものでない。其の實例を挙げれば。古今の宗教家の生涯に活躍して居る。たとへば、日蓮上人が。相州龍ノ口に於て。頸の座に座し玉ひし時にも。これほど悦びを笑へかし。この臭き頭を法華經に捧げて、

次から次と起つて、どこまで行つても止め度のないものである。其他、食物に就ても。金錢をためる事について。いづれも其の通りである。殊に面白いのは、百萬圓の財産家でも。臨終の時には、丁度餓鬼の有様だ。肴が一されたべたいと思つても。うどんが一と筋すゝりたいと思つても。もう口へは入らない。しまへには、水一盃も吞む事が出来ない。眞にあはれな状態になるのである。然るに、こゝに一つの不思議なものがある。それは宗教の信仰である。人一たび、此の信仰に觸るれば。總ての希望を、一時に充たす事が出来るのである。世間の慾望は、得た時には喜ばしひが。失ふ時には苦しひものである。又願境の時には樂ひが。逆境の場合には、非常に悲しひものである。然るに宗教の信仰は、全く之と趣きを異にして。如何なる時にも、大なる慰安を與へるものである。一體人には滅ぶる皮想の我と。滅びない眞實の我との両面がある。世間の人々が認めて居るのは。大抵この滅ぶる側の我である。日蓮上人のお言葉に、野邊

金色の如來となるは沙を以て金に換る様なものであると仰せられて歡喜に満ち玉ふたは。宗教の信仰より外には、決して得られない點である。世間の慾望と云ふ様なものは。孟子が、「不春不堅」と、云つて居るが。其の通りで。どこまで行つても、決して満足は得られん。限りのないものである。故に、食ふな衣るなどは云はんが。少しは、眞面目に考へて見なければなるまい。たゞ食ふこと衣る事のみならば。酔ふて生れて、夢みて終るものである。故に人間が、總ての望みを満たして。もうこれで、死すとも憾みないと云ふ境界に到るには。宗教の信仰に依るより外に道はないのである。信仰は實に人生の永久の春であつて常住の花であります。

更に、徳を顯はして行く方面に就ては、宗教の信仰に依つて。誠を養ひ。君に對しては忠。親に向つては孝。他人に接しては親切にして行く。と云ふ事に外ならん。云ふまでもなく。人間の生涯は短かいものであつて、直に死んで行かねばならん、死んで棺桶にカン／＼

釘を打たれるのが最後であるが。其時この者も世の中に居て。何事も仕なかつた。まことに、つまらんやつであつたと云つてカン／＼やられたのでは。寔に、つまらん事と思ふ。人間は尊い信仰の光に満ちて。家庭に於ても。國家社會に對しても。麗はしひ心を持つて接して行かねばなるまいと思ふ。現今學校で、いろ／＼な事を教へて居るが。いづれも、結構な事には相違ないが。世の中には、學問よりも、理窟よりも。尊い大なるものがあるけれども。之を發揮して行く事に重きを置いて居らぬ。それは、何であるかと云へば。徳性とでも名くべきものである。儒教で云ふ明德である。この大なるものの意義をはつきり教へて居るものは。實に宗教である。然るに、世の中の人々が。一般に宗教を侮辱して居るから。浮き／＼した味の無いものになつて居る。如何しても、世の人が。一番尊い、根本的な至福と云ふものを。宗教に依つて養つて行く事を忘れてはならぬ。この世の中は、互へに親切を交換しやつて行くのが花である。

るのである。今の、大きな立派な學校に於いて養はれるものには。あう云ふ美德は、中を顯れて來ない。それは何故であるかと云ふ事を眞面目に考へて見なければなるまい。地方の改良を計るに就ても。何より此の同情親切と云ふ事を。中心に置いて進んで行かんければ。其成績を擧ぐることは出來ない。大學と云ふ本にある通り。本末を正して、先づ根本を磨いて、行かんければならぬ。然しこれは、實に容易な事ではない。孔子の弟子が澤山あつたが。顔回一人がやつと出來た位なものである。然るに、宗教に依るならば左程困難を感せず其中心を確立し根底を培養することが出来る。これが又不思議な點である。宗教は偉大な人格の感化を主とするからである。どんな精神のねじれた者でも。佛陀の前に出るならば。丁度厚い氷が、太陽の光線に照らされて解ける様な工合に。自然に。大徳に化せられて温和な心持に還るのである。佛陀が、一たび不量見な事をしてはならないと仰せらるれば。たとへ如何なる悪人でも。亦智慧第一と

人生は決して無味な理屈ではいかぬ。麗はしひ親切の光りが、中心をなして行かんければならぬ。殊に人は、子供のときから、之れを養つて行く事が必要である。當小田原町には徳治監がある。此の中に、收容されて居る多くの不良少年は、如何なる心であるかと云へば。少しも、温かい親切とか、誠とか云ふ心の起らない、ものである。自分に、金の十銭か十五銭も貰へるとか。一寸酒の一盃も呑めると云ふことになれば。他人の迷惑など少しもかまはず。どんな家にも、放火する様なものがある。少しも思ひやりと云ふ事のないものである。徴治監で、も一此の者は、放免しても差支ないと云ふ見分けは。どこでするかと云へば。其者に、親切な思ひやりの心の出たのを以てよいとするのである。昔の聖賢の教へに「子を易へて教ゆ」と云ふ事があるが。これは實に千古の格言であると思ふ。彼の有名な廿四孝と云ふ様なものに就いて考へて見ても。貢しひ家庭に於て親子が互に感し合つて。あゝ云ふ立派な孝道が顯はれて居

云はれた理窟のほい舍利那の偉大な人でも。皆感化されて行くのである。この大いなる人格の感化は、日蓮上人に就て多く見る事が出来る。阿佛房の如きは、その一例である。阿佛房は佐渡で上人を後ろから、一と打にしやうと思つて忍んで行つたが。それでは、あまり卑怯であるから面と向つて一議論してからにしやうと思つて。二た言、三こと云ひかはして居る中に。上人の偉大なる靈徳に化せられて。無二の深信者になつた人である。これが、實に宗教の尊い點であります。世間でやつて居る免因保護事業の様な事でも。容易に悔悟しない、大罪人を。改心させるには。先祖の位牌の前で意見するのが。一番さ、がよいのである。現在監獄に入つて居る罪人の数は約七萬人であるが。その十分の六は再犯以上で。幾度も入つて來る奴であるが、斯様な者でも、本統に宗教の強い信仰の力に依つて感化すれば。決して教はれん事はないのである。法華傳と云ふ書物の中に。二人の娘が命を捨て、殺生をする親の心を驚へさした話がある。それは、非常に

獵りづきの親があつて。それを娘が、何だ意見して中々やめない。そこで或日、二人の娘が相談をして命を捨て、父を諫めやうと云ふので。眞白な衣物を着て。丁度鶴の様な形に作つて。川の邊りに並んで居つたのである。父は、よいところに、二羽の鶴が居ると思つて。忽ち打ち殺してそこへいつて見ると。自分の最愛の二人の娘であつた。これはどうしたわけであるかと尋ねると。二人の娘は、片息で。これまで何度あなたをお諫め申しても。お聞にならぬ故。今日は、こうして二人が命を捨てた譯であります。どうぞ、これかぎり殺生は止めて下さいと云つたものだから。父はあうおれが悪るかつた。どうか、許して呉れと云つて。忽ち不量見を改めたのである。宗教には斯様な事は山ほどある。心血を持つて行けば。如何なる人でも感せずには居られん。此頃は、二宮主義が、非常に尊重されるのであるが。あれも悪い事ではないが。決して斯様なものが根本ではない。人生にはもつと根本的なものがある。其の根本の要求を。本統に會得せん

ければだめである。其の上、金次郎でも、何でも持ち出すがよい。全體二宮でも、熱心な宗教信者であつたのである。今の二宮主義の人々が云ふ様なものはなかつた。今の社會が人を用ゆるに。只才を主眼として。他を顧みないから非常な弊害が生じたのである。どうしても、人を取り用ゆるには。才よりも徳を主として行かんければならぬ。是れは非常な大切な事と思ふ。縁を娶るにしても。何事よりも親切であるか、どうかと云ふ事を、第一に調べる事が必要であらぬ。若し親切と云ふ點に付て缺けて居れば。どんな立派な顔をして居ても。亦た學問などが如何に出来ても。取るに足らぬものであります。それで、前來連べ來つた通り。この人生には、徳を磨き、光りを顯はして行くと云ふ事が。一番大切な事であり。其の徳を磨いて行くには、宗教の信仰に入らねばならぬと云ふことを御承知になつて。宗教を尊重なさる事が何より詮要と思ひます。

南北兩朝正閏辨

本篇は南北兩朝正閏論に對する海軍大佐佐藤儀太郎君の意見の大要にして「日本及日本人」に掲載せられたるもの也。而して此の大問題に近時漸く文部省歴史教科書委員會に於て解決を見るに至りし大佐の堂々たる國體論は。以て世の諸學者の議論を一撃の下に撞撞すべき大鐵錘にも充つべき程のものと信じ、日本及日本人記者伊東知也君の承諾を得て、こゝに掲ぐることにしたり。(三上生)

我御國體の無上崇嚴で物の以て比すべきなきは、獨り我等五千萬同胞のみならず、世界萬邦の齊しく仰ぐ處である、神皇正統記にも、

我が朝のはじめは、天神の種をうけて、世界を建立する姿は、天竺の説に似たるかたもあるにや。されどもこれは天祖よりこのかた、繼體たがはずして、たゞ一種ましませること、天竺にもそのたぐひなし彼の國の初の民主王も衆のために撰び立てられしより相續せり。又世くだりては、是の種姓も多く亡ぼされて、勢力あれば、下劣の種も國主となり、あまさへ、五天竺を統領するやからもありき。震旦、また、ことさら、みだりがはしき國なり。昔世すなは

日蓮上人云く

よよ道心堅固にして、今度佛になり給へ、御一門の御房たち又た俗人等にもかゝるうれしき事候はず、かう申せば今生のよくとおぼすか、それも凡夫にて候へばさも候べき上、欲をもはなれずして佛になり候ける道の候けるぞ、普賢經に法華經の肝心を説て云く煩惱を斷せず、五欲を離れず等と云云

に道正しかりし時も、賢をえらびて、授くる跡ありしにより、一種を定むる事なかりき、亂世となるまゝに、力を以て、國を争ひぬ、かゝれば、民間より出て、位に居たるもあり、成狄よりおこりて國を奪つるもあり、或る累世の臣として、其君をしのぎ、終に讓を得たるもあり。伏羲氏の後、天子の氏姓を替たる事既に三十六、亂のはなはだしき、いふにたらざるものをや。唯我が國のみ、天地ひらけし初より、今の世の今日に至るまで、日嗣を受け給ふ事、よこしまならず、一種姓の中におきても、おのづから傍より傳へ給ひしすら、猶正にかへる道ありてぞ、たもちましくける。これしかしながら、神明の御誓あらたにして、餘國に異なるべきいはれなり。

と云うてある。北畠親房卿は實に千古の大忠臣である、其人格に於て萬世の師表たるべき御方である、況んや學比倫を絶し、論古今を照し、至正至公、神明に通ずるの至誠を以て、言々語々に血涙を注ぎ、我が御皇統の正閏を論せられたるこの神皇正統記は、實に我等其たぐひなし、……震且また殊更みたりかば、しき國なり。」と仰せられたるは、これを彼の日蓮大聖人が神國王書に於て「我日本國は、一閭浮提の内、月氏漢土にもすぐれ八萬の國にも超たる國ぞかし」と喝破せられたると相對し、無限の神力あるが如く感ぜらるゝのである。

然らば我日本國は何故に世界に比類なきたふとき國柄であるかと云へば、准后の仰られたるが如く、萬世一系の御皇統を戴き、終始變せざるにあること勿論であるが、特に注意すべきは「唯我國のみ天地開けし初より今の世の今日に至るまで、日嗣を受け給ふことよこしまならず」云々といふにあるのは疑を容れざる次第である。吾輩は親房卿の仰に對し決して蛇足を加るの必要がない、乍去我大日本帝國の崇嚴無上なる靈徳を備ふるは獨りこの點のみならず、我金甌無缺なる御國體に絶對の意義を有すること明白なるの致す處である。譬へば、一家内には主従自ら序ありて定まる處あるが如く、儼然たる天來の父兄あればこそ、一家の尊嚴と

國民の敬讀すべき經典である。

神皇正統記は徹頭徹尾金玉の文字である、神皇の二字には神威咫尺、人をして肅然として襟を正さしむる威力があり、正統の二字には奸邪をして色を失はしむべき至大至剛の獅子吼がある。苟も其の議論の適否を論じ其の思想の正否を議せんとせば、少くとも、先づ第一に、親房卿に譲らざる至誠と同卿に劣らざるの人格を有せなければならぬ。かう云うては濟まぬが、今の世の片々たる考證萬能の機械的歴史家の如きは、唯其一面たる皮相の歴史を論ずるならばいざ知らず、苟も御國體の如何に崇嚴に、如何に雄大に、如何に神聖なるかも信解せずして、猥りに親房卿の論じられたる主意に容喙せんとするが如きことあらば、それこそ身分を知らざる大の嗚呼者と謂はなければならぬ。

此點より考へて見れば吾輩などは、恐らくは同卿の議論を批判すべき資格を有せぬものである。乍去、同卿が我御國體の崇高無雙なるを感得せられ、「天祖より以來繼體たがはずして、たゞ一種ましませる事天然にも安事とを維持するのである。もしも主人と家族とに相對的關係あり、智力富力及徳力等の優劣により其家長を定むべき家風ありとせば、一日と雖も平和を維持することは困難である。即ち相互に家長たらんことを争ひ、長兄を剋するの小弟あり、父を逆するの兒孫ありて終に底止する所を知らざるに至るであらう。然るに我日本帝國には「かみながら」の君王ありて我等臣民に臨ませられ、如何なる富力も兵力も將た智力も徳力も以て如何ともする能はざる底の大靈力(御稜威)を保有し賜ひ無始の古より堯舜、禹湯、孔釋、陶翁輩の夢にだも汚漬し得べからざる靈位を繼承せられ、之を無疆に傳へさせらるゝのである。此無始無終常住不滅なる大意義こそ絶對の二字を説明すべき事證であるので、永遠に大平和を維持すべき理想的國家は此の如き意義を有する君主を戴き、此如き意義を解釋し得べき國體を有するに非ざる以上は到底成立し得べき望がない。

所謂天來の君王統を萬世に垂れ、「開闢以來君臣の分定り臣を以て君となすは未だこれあらず、天日嗣は皇緒

を立つ」底の神聖にあらざれば大峻徳の宿るべき靈位にあらざるは勿論である。即ち此の神聖の意義を有する大峻徳を戴く靈山寶土にあらざれば絶對を意義する國體を成形することが出来ぬ。而かも、この無上崇高なる御資格は、乍畏我御皇統に於て之を拜することを得るは、我等臣民の戴くべき無上の名譽である。此名譽は實に我國民の「天職に對する自覺」として表顯すべく、此自覺こそ、崇高無上なる御國體を千萬歳に傳ふべき自強の道となつて表はれ、儼然として範を世界に示し、人智自ら進み、機運自ら熟し、世界の人類が御稜威の何物たるを悟り、凡そ世界に於ける政體は、其君主獨裁なると、立憲なると、共和なるとに論なく、悉く皆な優勝劣敗の意義を合むに着眼すると同時に、帝國歴史の傳ふる如き、絶對なる君主を戴くにあらざれば、世界の平和を永遠に維持すること能はざるの理を悟るに至らしむべき、唯一無二の天職を表するのである。もしも我等同胞にして、果して眞實に、我御國體の絶對なるを信解し、此靈妙なる意義を生じたるは

何は魂もあれ世間の迂闊なる學者が、誇り顔に言ふべからざることをも言ひ出し、世間の思想界に厭ふべき波瀾を起すなどは不都合極まる話で、假令ば神武天皇の御東征に關して、かう云ふ説を聞くなどは誠に以て沙汰の限りである。

或る學者の説に神武御東征の際に長髓彦の奉戴したる饒速日尊の御子宇麻志間見命は、天照大神の御爲には寧ろ正系にあらせらるゝが如く見える。瓊々杵の尊は正しく饒速日尊の弟君にあらせらるゝと云ふことである。成る程これは一理ある議論である。成る程一理ある議論であるが、矢張議論と云ふに過ぎぬので、皇位御繼承の絶對なるを知らざるの過である。皇位御繼承の古義は、決して長幼とか徳不徳と云ふが如き論に左右せらるべきものにあらざして、たゞ、天皇の御鑑誡を以つて天日嗣を定めさせらるゝのが大本義である。決して他より何等の議論をも挿まないのが皇位御繼承の古義である。荒道の稚郎子が韓來の儒教思想に感染せられ、「長幼有序」の教を以て「先帝の御宣勅」よ

決して偶然にあらざして、必竟無始無終常住不滅なる御稜威の妙用に外ならざるを悟つたならば、其の本原たる天位御繼承の問題も、亦た絶對神聖にして理論の上に超絶すべきを悟るであらう、少くとも相對的の推理により、判斷すべきものにあらざるを了解するであらう。況んや臣下の身を以て議論を挿むなどは第一の不心得であると云ふことが分るであらう。然るに近來聞く處によれば、世間には此の如き「神聖にして議すべからざる」一事務をすら、一片の推理に基きて輕易に解釋せんとする不丁見者が多いと云ふことであるが、これは一層畏れ多きことである。乍去、我等臣民の根本的思想は御皇統に對する觀念より生ずるのであるから、もし萬一不都合な辯論を敢てするものがあつたならば、それこそ劇烈に攻撃して完膚なからしむるの必要がある。假令、少しく中庸を失し、穩健を缺くものがあつても、其の精忠の志は大に稱讚すべきことであらうと思ふので、これは所謂「以戦止戦雖戦可也」の筆法で、實際不得已次第であると云はなければならぬ。

りも重しとなし、それが爲めに忠誠無二なる國民をして適歸する所に苦み、三年の間うろ／＼に過させられたのであるが、これは一團合點の行かぬ話である。之に反し開化天皇の御爲には、同母兄にあらせらるゝ大彦の命が、弟君開化天皇、甥君崇神天皇の御兩帝に對せられたる御様子、特に武埴安彦の難に對する御誠意、四道將軍としての御偉績などは、誠に以て感激の外なく、一意に御皇統を擁護し奉り、御稜威を萬々歳に傳へまつれる大忠の御振舞は、八面玲瓏玉の如く、何等一點の私心をも有せられざる神々しさは、明かに皇位繼承の絶對なるを表せらるゝので、誠に以て畏れ多き次第である。

南北朝に關することの如きも、これ等の古義を重視せざるの結果として、杜撰なる言説を弄するものすらあるに至つたと云ふことであるが、誠に以て嘆はしき次第である。吾輩は歴史家でもなんでもないから、正々堂々と議論を闘はずべき資格がない。亦議論を挿みて彼れ此れ呼號する程の阿呆でもない。第一臣下の身と

して漫りに之れを議論するのは畏れ多き次第で、成る丈けから云ふ問題の出ないのを熱望して居るのであるが、吾輩とても自分がかう信じて居る位のことではないでもないのだ、全體から云うて見れば、吾輩の思想としては南北朝の區別は認めて居らぬ、また御國體上決して存在を許すべからざる思想であると吾輩は信するのである。其甚きに至ては我御皇統は北朝の御血統であらせらるゝ等と放言する者もある、是などはどうしても穩な考ではないと思ふ。是等の論者は北朝と如何なる點に於て御血統が相違して居ると云ふのか吾輩には分らぬ。吾輩は茲に斷言する。共に乍畏天祖太御神の御末で神武天皇の御後裔で、亦正しく後嵯峨天皇の御子孫にあらるゝので、其間に何等の御隔てもあらせられぬのである。此場合に於ては、せめて後深草天皇の御血統にあらせらるゝと稱す可である。もしも萬一南北兩朝對立すとせば、「天に二日なく國に二王なし」との國民的大思想を如何に解釋するであらうか。我日本國に二人の天子ありとは、他の不淨の國史を有する國々な

の芽出度御代となつたので、決して南朝より北朝に天日嗣を移されたのではない。龜山天皇の御系統たる後二條天皇より、後深草天皇の御系統たる花園天皇へ御傳へになつたのと同じの意味合で、龜山天皇の御系統たる後龜山天皇より、後深草天皇の御系統たる後小松天皇の天日嗣を御傳へになつたのであると吾輩は承知して居るのだ。是等の點を考へて見れば、南北對立などの惡思想を起すべき理由がないではないか。假令如何なる事情により御即位になりましても、天日嗣の御傳承は絶對である。此の絶對の意義を知了すればこそ足利義滿等も非常なる苦心を以て、後小松天皇に對する御傳統を奏請したので、此の一事を以ても全般の事情が明白である。今日に至り、南北兩立を論ずるが如きは、足利義滿にも劣りたる考であると云はなければならぬ。されば御一統以前に於て尊氏等に從ひ、精忠を擡でたる人々は、其の思想の如何に關せず逆臣である。況んや自己の賊名を免れんが爲めに光明天皇を擁立したる尊氏直義の輩は、如何に辯護するも到底免れ

らばいざ知らず。我帝國に於ては決して許し難き大妄語であると吾輩は思つて居る。もし萬一他の諸外國の如き相對的意義を以て成立したる國體の通理を應用して我無上崇嚴なる唯一無二の靈國の上を付度し、政權のある處は則ち天子の在す處なりと論ずるが如き者があつたならば、是實に御國體に對する大罪人である。北朝の勢力の強盛なるを述べ其王化に霑ふことの南朝よりも廣きを説き、是を以て正閏を定めんとするが如きことあらば、これ實に民主的惡思想に感染したる大謬見である。勢力の大小を以て絶對の意義を有する大靈位を輕重するが如きは、極めて鄙賤なる觀念の作用である。何は免もわれ、後醍醐天皇が正當に天日嗣を受けさせられたるは疑もなき事實であるが、其の後に、何と云ふ御方が御即位あらせられたのであるか。後醍醐天皇は、興復を御遺詔あらせられ、大統を後村上天皇に御傳へ遊ばさせられたのである。其の後時勢の變遷により後龜山天皇より正式に天日嗣を幹仁親王(即後小松天皇)に傳へさせられ、茲に初めて海内一統

難き逆臣である。もしも直義と確執の結果降を吉野に請はんが爲めに崇光天皇を廢し奉りたる正平六年の事實にして誤なしとせば、大逆無道の賊臣たること彌々益々明白である。人によりては南北兩立は事實である、此事實を認めぬのは議論を挿むと云ふものである、これは決して穩當でないと思ふ人もあるが、これなどは御國體に關する熱烈なる思想を有せぬ人で、苟も皇位御繼承の絶對なるを悟つた以上は、こんなことを云ふのは畏れ多い事である。勿論南北正閏の議論は臣下たる吾輩等の嘴を容るべき處ではないのであるが、臣下の志を養ひ、且つ同僚や部下にも熱烈なる御奉公の志操を與へ、御勅諭の五ヶ條の精神を守らなければならぬのは無論である。苟も我等の思想を攪亂するが如き邪説を聞かざらば、全力を盡してこれを撲滅すべきは吾等の本分である。さらぬだに世間に邪說流行し、思想界に大混亂を起し動もすれば驚くべき惡影響を生せんとする今日に於て、盛衰強弱の如き相對的思想を

天位繼承の大事に來み、順逆の分をすら不明瞭ならしむるに至ては誠に以て痛嘆すべき限りである。第一かういふ問題が世間に置しくなるのが宜しくない。何は兎もあれ、吾輩の確信はかうである。古來我國民の精忠無比なるは、天祖以來列聖の靈徳の然らしむる處なるも、歴史上に於ける訓戒、殊に「楠公父子の忠烈」なる模範が、如何に偉大なる勢力を有し、我等同胞に誠忠の志操を鼓吹しつゝあるかは明白なる事實である。

不忠を惡み忠節を慕ふ熱烈なる思想は、尊氏直義を逆賊と呼稱すると同時に沛然油然として起さるのである。蘇我の倉山田石川磨が、讒言によりて誅せらるゝとき、其子興志が憤慨して官命に抗せんとするをといひ、「願我生々世々不怨君王」と云うて父子共に自殺して臣節を全うしたなどは、實に千古の美談である。自己の誅を畏れて光明天皇を擁立し、王師に抗したる尊氏の如きは決して我國民の列に入るべき資格がないのであるが、是れと同時に尊氏の如き逆臣にても御皇統を擁立せずには、到底何事をもなし得ずと信じたる他の半

楠公の忠烈は楠公の薨後千歳一日の如く忠義の思想を我等國民と子孫とに與ふるにあつて存するので、これを湊川や四條畷に戦死したる肉身の忠烈に比すれば、千倍萬倍の相違である。若しも萬一忠義の反證となり燃るが如き忠烈の思想を我國民に鼓吹しつゝある尊氏をも、逆臣の列より脱せしむるが如きことならば、それこそ尊氏の爲には大なる不親切である。尊氏こそは逆臣として永く存在し、これにより忠節を國民に鼓吹する靈的忠臣として我が日本帝國の爲に働かなければならぬのである。然るにもし今日に至り衆旨の爲に評殺せられ、逆臣の列を去つたならば、我國民の思想界に於ける、順逆の道は忽ちにして暗く、尊氏の靈身は未來永劫、其の肉身の罪を亡すによしなき境遇となるであらう。これこそ、ひいさの引倒しと云ふべきもので、此點に對しては大西郷も嘸かき苦笑して居らるゝであらうと吾輩は思ふのである。

(15) 何は兎もあれ、若し萬一尊氏直義を初め、高時義時の輩に至るまで、これを賞して國家の功臣とするか如

面こそ、我等日本國民の誇りとする處である。假りに尊氏直義等と共に忠勤を擡でたる將士ありとするも、彼等の多くは、不明の爲め不幸にも、尊氏兄弟の點策に罹つたので、其心は寧ろ憫むべきであるが、一たび大義名分を誤りたる以上は氣の毒ながら逆臣となつて實はなければならぬ。即ち逆臣として史上に歌はれ、其の間に我等臣民の思想界に精忠の意義を鼓吹し、よつて以て我國民に「唯忠爲尊」の大觀念を與へたので、此の點より見れば、我が國體の御擁護上、一廉の御奉公をなしつゝあるのである、即ちかれ等の肉身は逆臣にして彼等の靈身は忠臣である。然るにもし今日に至り逆臣の名を除去され青天白日の身柄に變化したりとせば、折角靈的に肉身の大功を賠償しつゝ、忠臣の働きをなし居る彼等逆臣等は、靈身に於ても逆臣となり、永劫未來生時の大罪を減すべき時がないのである。元來楠公の忠烈は、實に千古の模範である、乍去肉身としての忠烈は其忠烈の全部ではない、假りに明確に其一部なりとするも殆んど百分千分の一小部分である。

きことがあつたならば、國民の思想を何れに逆歸せしむることが出来るであらうか。それこそ由々敷大事である、誠に許し難き明教の汚點である、これはどうしても熟考して貰はなければならぬ。

南北正閏の關係に就ては、吾輩は前にも言つた如く決して南北對立を認めず、北朝の天子を以て正當なる天子の御分身と認むるのであるが、これ等の點に就ては尙一言を要するが如く思はるゝのである。もし吾輩の議論が正當で、尊氏直義等を赦し難き逆臣なりと決定したりとせば、北朝の天子も亦た悉く逆の意義を有せらるゝので、我等國民の仰ぐべき御方ではないかと云ふに、それは決してさうではない、決して此處を誤解してはならぬ。我御皇統に對する我等臣民の思想は何等の差別がないのである。もしも彼の際に尊氏兄弟をして今一層惡逆無道の心を蓄へしめ、而してまた萬一不幸にして南風の鏡はさること更に一層甚しからしめたならば、我御國體は危險なる境遇に陥つたかも知れないのだ。此の一點は我等臣民の形を正して拜想し奉

るべき所である。即ち北朝の御歴代は吾輩等が下世話に申す「御扣」の御方々にあらせらるゝので、御國體の擁護上、萬一に備へられたる御方々にあらせられたのである。此點に對してはよく心を用ひ、北朝御歴代の御神靈に對し奉り誤て妄想を逞うし、粗末なる思想を起してはならぬ。併しながら何は兎もあれ、我國民をして尊氏直義の惡むの念を滅せしむるが如きは、思想界の大事である。國に二王なしとの觀念に動搖を來さしむべき邪説の如きは根本的に不祥なる議論である。惡逆無道の北條義時すらも其子泰時に對し「錦旗一たび動かば、如何なる場合にも戈を投じて拜伏し謹で罪を待てよ、もし萬一錦旗にして出でずんば武門の習ひ、決して敵に背を見するな。」と云うたことがある。これなどはよく味ふべき價值があると吾輩は思うて居る。さりながら此の如き小事實を以て義時を忠義の士に數ふことは決してならぬ。日蓮上人が「隱岐の法皇は天子也、權の太夫殿は民ぞかし、子の親をわだまんをば、天照太神受け玉ひなんや、所從が主君

の御子幹仁として天日嗣を繼がせられたと思つて居るのである。爾來皇位の御繼承は、龜山天皇の御爲めには兄君にあらせらるゝ、後深草天皇の御系統にて、御繼承遊ばさせられ、以て今日に至つたのであると承知して居るのだ。かう云ふ風に考て見れば、何等の疑ふべき點がないではないか、つさらぬ事に拘泥し、無上崇嚴にして絶對なる御國體に厭ふべき曇を留めんとするが如きは、心あるものゝなさる處である。もしも眞率に我が御國體の難有き御様子を拜せんとせば、心を清くして黙考するより外はないのである、如何に「以戦止戦難戦可也」と云うて見ても、實際は誠に恐惶に、堪へぬのである。どうかもうかう云ふことに議論をすることはやめて貰ひ、大切の上にも大切なる思想界に、不健全なる分子を投げ込む様な挑發的なことを禁じて貰ひ度ものだ。世の中に國民に不健全なる思想を打込む程恐ろしいものはない。神髓の明教はどうしても曇らん様に爾々益々、光彩陸離たる鹽梅に願ひ度ひものだ。

を敵とせんをば、正八幡は御用ひあるべしや」と喝破せるが如き、また「謀叛のもの二十六人……第二十六人は義時なり」と叫びたるが如きは精氣凛として犯し難さを覺ゆるのである、種々の事情を酌量し逆臣を允して其の罪を問はざるが如きは、必竟大義名分に對する觀念の萎靡したる結果である。天日嗣の御繼承に、くだらぬ理義を挿み、之が爲め正閏の議論を生ずるが如きは、御國體に對する思想の衰へたる證據ではなからうか。

皇位の御繼承に南統北統を分立して考へるのは、天祖及び神武天皇を御忘れ申上たる不臣の解釋である、と吾輩は信ずる。逆臣北條が、便宜上勅宣を請ひたる南統交立の變體を是認し、後深草龜山兩統を別系なりと誤想するは許し難き迷想である。吾輩は全然南北兩統の存在を認めず。後醍醐天皇より後龜山帝を経て後小松天皇に至る御系統の外、何事をも認むることが出来ぬと信ずるので、後小松天皇は皇位の御繼承上、後園應天皇の御後にあらせられずして、乍恐後龜山天皇

日本の端書

印刷局に於て印刷する印刷物の種類は紙幣公債証券郵便切手収入印紙證券等の政府より發行するものは勿論また民間の依頼に應じて證券株券等を印刷して居るが其印刷物の内一種にして最も多數を占め自然從事員を多く要するのは郵便端書である。四十三年中の製造枚数は實に五億七千六百九十八枚に達し本年度には僅に六億萬枚を超過すべき課定であると云ふ現在之を印刷するには帝國式最新式印刷機で一分間に三千五百五十枚一時間二十二萬五千枚一日十時間二百五十萬枚を印刷し得べきもの二臺外に補助印刷機數臺で之を交互運轉して毎日約二百萬枚を印刷して居る而して之が製造費は四十三年度分五十二萬八千三十二圓で一枚九毛二朱強に當る又政府収入は八百五十七萬五千四百七十圓であると云ふそれで端書百枚の重量は五十九克内外で一年間の製造は實に三千五百萬貫なりといふ。

本誌第九十八號「日蓮主義より視たる婦人の地位」と題せる一篇は小笠原閣下の校閲を経ずして記者の筆記せしめを掲載したりしが記者の淺識に加ふるに誤謬等ありしため閣下より訂正文を寄せらるる讀者は前説に對照して再讀せらるゝことを望む

(三) 上 記

頁

行

筆記文

訂正文

十一

下段十二行ヨ

世の上人を論ずるものは悪口を言ふから嫌だと言ふが………努力したのは真に法華經の行者である

世の上人を嫌ふものは概ね上人が他宗を攻撃するのを好まぬと云ふが之れは單に上人を以て悪口好きだと云ふやうに淺く解すべきものでは無からうと思ふ上人の觀られたる當時の我が思想

十二

上段八行ニ至ル

………努力したのは真に法華經の行者である

支那佛教の中毒に罹つて居ると感せられた而かも是等の佛教は末法應時のものでないされば御國より云ふも正法より云ふも捨て置く譯にゆかぬとの大慈悲より發動し來れる折伏で據つて以て一は帝國の靈氣を輝かし一は正法を立て、全人類を救済せんことを期せられたので先づ日本國民に本有の本國相を説いて警華を興へ更に進んで法國冥合の大理想を述べられたが理想の法覺經が世間法となりて實現する場合を指して

十二

下段七行ヨ
十一行ニ至ル

釋尊が愉快なる御姿にて光明を放つながら………

釋尊は平生の如く愉快な御姿で無く光明現せずして如何にも寂靜なる御様子で吾れ涅槃の後法滅せんとする時五逆の濁世魔道興り盛んなりと喝破せられ夫れより懇に濁世に於ける僧俗の有様を説かれました

讀だものは少かつたが

其信仰の對象等に關する議論は暫く措くとして

十二

下段五行ヨ
六行ニ至ル

其の信仰は間違つて居りました

其信仰の對象等に關する議論は暫く措くとして

十四

上段八行

言ふたのであります

言ふたので勿論盜臣を善いと言はれたのでは無いそれと同意義に解すべきで即ち

十四

上段十二行ヨ
下段二行ニ至ル

私共は軍隊に居りまするが勅語を拜讀致しまするに………至誠一貫の行がなければ何等の價値がない

申すも惶けれど吾々軍隊に賜つた 勅語に 此五箇條は我軍人の精神にして一の誠心は五箇條の精神なり 心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはべの裝飾にて何の用にか立つべき心だに誠あれば何事も成るものぞかしと仰せ下されてある洵に至誠は體道より言へば天地の公道で用道より言へば倫理道德の生命である

十四

下段五行ヨ
十一行ニ至ル

亦淨土と世界との問題でありまして………勿論斯かる極樂は誰しも望む所でない

小生の述べたる意義と少しく違ふ故に削除す

十六

上段一行

神秘的作

感應的作用

日蓮上人云く

佛に成る道は善知識には過ぎず、我が智慧何にかせん、唯温養計りの智慧だにも候ならば善知識大切也、而るに善知識に値ふ事は第一の難き事也

日蓮上人の至情

本篇は東京神田和強學堂に於て、國民通俗學會開催の講演會にて演へたる原稿也、紳士多數にして講演時間僅かに三十分、情の日蓮上人としての一部をも紹介するを得ざりしは頗る遺憾とする所也 (三上白碧生自記)

記者

偉人日蓮に對する人格研究は、有ゆる階級を通じて甚だ旺々也、然れども其研究の態度多くは躊躇として公正を缺き、所謂英雄的部面の一段に踏み止まりて、未だ進んで精細に全方面に互りて之を窺ふもの少なきは、吾人の大に遺憾とする所也、彼の嵯川文學士の日蓮聖人傳や、通俗講談家の柴田燾の日蓮傳、また基督教徒なる木下尙江氏の日蓮論出でしと雖、偉大なる上人の人格に觸れ其眞價を味ふには、遙かに遠きを覺ゆる也、

世人は、上人が電光石火迅雷急雨の活動のみを窺ふて、何となく荒々しき凄い人物なるが如く評論するものありと雖、是等はいまだ上人の宗教及國家に對する

子日朗の身を思ふて、愚癡狀一篇を草して深き慈悲の涙を垂れ、身讀法華の修行のために殫れよと教訓を與へたるは是れ上人にあらずや

上人は人心を亂し國を毒する者に對しては、一步も假借する所なく大に峻嚴なる折伏を用ゐたりしと雖、其一面に於ては、恰も乳房を赤兒に含まする悲母の如く、情濃かにして優にやさしい、唯だもう何となくふはりとしたる嗜しうてならぬ御心地にてあり給ひし也

弟子日朗に與へられたる土籠御書を拜せよ

日蓮は明日佐渡の國へまかるなり、今夜の寒さにつけても、半の内のありさま思ひやられていははしくこと候へ

あゝいかに誠實なる情の溢れて、思ひやりの深き消息にあらずや、當時、上人は世に名高き龍の口斷頭場裡の厄難より去りて、今亦更に何等の罪科あらざるに北海波荒く風冷たき佐渡の島へ流さるゝ身となりぬる慘劇の間、弟子の身を思ひ案じての切なる心根は、いかに愛情のやさしゆうて亦尊とげなることにあらずや、

大理想大革新の教條を知らざる一輩にして、敢て論ずるに足らざる也、上人が獅子の如く猛き性格の内面には象の如くやさしき性格を包み、右の手を以て子を打つ父の大慈あれば、左の手を以て其頂を撫で、可愛の涙を湛へたる母の大悲を有する也、

觀よや、當年、鎌倉山の夕風に俗耳を拂つて、佛學研鑽の三昧に入りし道隆良觀等の名僧ありしと雖未だ時勢の危機を叫んで天下の覺醒を促がしたるものはあらざる也、墨染の法衣に、緋威の鎧に長刀振りかざして、狼籍を働ける僧兵幾千ありたりしも、未だ子を亡ふたる母親に、温かさ同情の涙を送りし宗教家あらざりし也、然るに、吾人は唯だ獨り鎌倉時代史に於て、上人が特に陸離たる光彩を放つて悠然活歩せられたるを窺ふを得るなり、知らずや、天下の危機を號叫して治國の根本義たる安國論を草し、執政者の覺醒を迫りしは上人にあらずや、子を亡ふたる信徒の母御に對し厚き同情の愚癡狀を送りて人生の眞意義を諷得せしめたるは上人にあらずや、鎌倉土牢に押籠められたる弟

あゝ孝子日朗は、鎌倉土の牢を出で、四十九里の波路を超え、佐渡が島六尺四面の塚原三昧堂に師日蓮を訪づれ、颯爽たる雄姿を拜して懇なる教誡をうけ、噺し泣き難有さ涙に幾たびか袖を絞りし也、母の如き師日蓮の温情に感じたる也、正に高さ人格の靈化に包まれたる也、日朗に送られたる土の籠御書は今なほ潑潑として活ける也、吾人は師弟の道義衰へたる現代に於て、特に上人の如き師表に接し、我等の小さき人格なりとも之を模範として修養するを得るは豈に至大の幸榮にあらずや、

吾人は更らに歩を轉じて至孝なる上人を窺はむ日本極東の一角、安房の國は上人の故郷也、故郷には上人が戀しき父母と師道善坊の御在せし地なり、而して半生の苦學によりて諦觀したる宗教的新信仰を宣言し激烈壯快なる活劇の序幕を開きたるも、亦故郷安房の國也、建長五年、宗教統一の教條を提示して清澄山上に法鼓を鳴すや、激しき反抗に逢ふて腕力の無禮をうけたるも安房の國にてありし也、然り然れども上人

はつねに生國安州を戀しく思ひ給ひし也、

北海佐渡の島再び鎌倉へは歸る可らざるを思ふて、往時茫々二十餘年の奮闘史を顧み、悔恨百痛、げに厚き思を運びて忘れ得ざりしは、安房の故郷と懐かしき父母と師道著其人なりし也、故に其消息狀に言はずや又父母の墓所を見る身とも成がたしと、思ひやりしかば、今更飛び立つ計り

あ、此の消息狀を拜讀して、誰れか同情の涙にむせび、至孝なる熱情に感せざるものあらんや、身延山上松風殘月の天、草庵の破窓に風洩るゝ時、父母の身に想ひ到れば何とのう戀しくて、吹風立雲までも東の方と云へば、草庵を出で、わざ、身に觸れ、感慨無限幾たびか泣いて袖を絞り給ひし也、されば上人の言はく

今一度本國に到りて父母の墓を見んと思へども、錦を着て故郷へは還れと云事内外の控なり、指せる面目なくして、本國へ到りなば、不孝の者にて有んすらん、乃至一時父母の墓をも見よかしと

變態の警鐘を鳴らして熱狂的運動を試みつゝある間に於ても、一度は國家の命令なりとせば一身の拘束せらるをも甘じ、敢て抵抗するものあらざりき、自ら言はずや、

身體は元より主君の命のまゝに差出すべきなり、あゝ其の寛大宏量の質、吾人の村度し得ざる所也、又上人は家庭に於ける夫婦の心得を示し、服従の美德を養ふべきを教へたり

母に背く妻、父に逆へる夫、豈重罪にあらずやあゝ是れ家庭道徳を透見したる痛切なる大教訓にあらずや、吾人は今此の教訓を拜して氣塞り胸逼るの感なき能はざる也、いまや文明の餘澤として教育の普及を見るものありしと雖、一面には偏狹なる個人主義本能主義を出だして、深く人心を毒し親子の愛情を殺ぎ、家庭道徳を破壊して服従の美德を傷け、母に背き父に逆へる家庭を作らんとするの悪傾向を招ぐに到れり、特に吾人は現代教育を受けたる婦人に其多きを見る、若し夫れ婦人雜誌を一讀せんか全篇殆んど忌はしき文

深く思ふ故に、干今、本國へは到らぬども、さすが戀しくて、吹風立雲までも、東の方と申せば、鹿を出で、身に觸れ、庭に立て見るなり、かゝる事なれば故郷の人は設ひ心よせにおもはぬ者なれども、我國の人と云へばなつかしく待りつるなり

と如何に純潔至孝の誠意、故山を懐ふの衷心、溢れて以てかゝる大文字となりしものと信する也、上人は佛陀の遣使なり大日本に於ける純乎たる宗教家也、世の凡庸の僧徒の如く、徒らに物慾の満足を得んとする者にあらざる也、されば身に錦を纏ふことは願はざりしも、心に錦を着て父母の墓前に跪ぶき宗教的の大事業の成功を告げ、熱き涙を著者滑かなる無言の墓石に灑いて、海嶽の恩義に感謝の意を捧ぐべく切なるものありし也、一日片時も父母の身を忘れ給はざりし也、あゝ如何に優美にして尊とき孝情にあらずや、而してさらには上人は世人の景仰して已まざる獨立自重の念強烈を極めて當るを得ざるが如しと雖、一面に於て服従の美德に富めることを知らざる可らず、上人は如何に國民

字ならざるはなき也、上人の諷諭に聞け

暖かなる夫をば懷きて臥せども、凍へたる母の足を暖むる女房なし、

いかに現代における若き夫婦の心理状態を洞見したる大文字にあらずや、吾人は此の二十九字の諷諭は、明かに小さき胸を刺されて戒心の銘とすべき千古の格言なるを信する也、

上人が吾人に與へたる大教訓は、各方面に亘りて懇切教示せらるゝものありと雖、今之を述ぶるの機會を有せず甚だ遺憾とする所也、吾人はこゝに上人のやさしき方面に於ける一部分を述べたりしが、一般國民が人格修養の師表として、上人の如き美はしき感情に憧憬すべく、公正と敬虔の心地に住して研鑽の歩を進められんことを切望して已まざる也

修養

日本の國體と日蓮聖人

教界の碩學、清水梁山氏が畢生の熱血を瀧いで公表せられたる意見であつて、考證該博、識見卓越、四百十一頁の大議論である、其立教開宗を述べて日本國との關係を説き「夫れ千光山頭東天の旭日に對する十遍の唱題は日超本國の教法を立つる所以なり更に南面の持佛堂を擇びて四箇の格言を掲げ給ふ曰く念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊乃ち是れ王命を宜ぶるの公式にして臣庶に蒞むの大典なり蓋し唯我一人の神皇肅として厥の後に在すの意に由るのみ嗚呼聖人の立教開宗や厥の儀實に欽しめりと謂ふべし」と論じ、更にまた、教義的關係と史實的關係に及び、日本國と法華經との關係には二あり一は法華經の教義と日本國の國體との一致關係二は其の一致關係が單に理論に止まらずして事實上相離れざる因縁の關係是れなり乃ち教機時國教法流布の前後を辨ふる所以の要はこの二の關係を識るに在るなり、夫聖人の宗教は本化の別付上行の所傳にして厥の事記して法華經の如來神力品に在り聖人「御義口傳」に

親らこの品題を釋して曰く如來ト神トノ力ノ品ト可得心也云々、如來の力は佛法なり神の力は王法なり王佛一乘の妙法蓮華經を本化の上行に付屬するが故にこの二法の力を十種に現じたりとなり言はゆる神とは外國の神に非ずして我日本國の神なり」と、堂々雄大なる一流の筆を呵して日本國體と日蓮聖人との關係を詳論し、王佛一乘の眞相を發揮して餘す所なしである

想像と人生

兒童心理學の泰斗、高島平三郎氏が其著應用心理講話に論じて居る一節に云く、人生が若し現實のみであつたら如何にはかないものであるか此儘で生涯終らねばならぬ今日の狀態以外のことを考へることが出来ぬやうでは人は殆んど虫けらにも及ばぬものである現實の世界のみでは人の價値は少ない現在に超越して心を高尚にするは想像の働である書生が下宿屋に籠城して大言壯語して居ると云ふのは未來を考へ高い理想を持つことが出来るからである若し理想がなかつたら人間は生きて居る甲斐はない殊に婦人に勧めたいのは此點である日本の婦人には理想が乏しいから精神が發達せぬのである假ひ如何なる詰らぬ所に居つても現實の世界以上に超越した事を考へ之に向つて進んで往けば其人は高尚なる

人である故に眞に宗教を信じて居るものは現實世界を超越した神佛を理想として居るから全く信仰のないものよりも心が高尚である併しながら余は必ずしも空想を勤める譯ではない、唯高い理想を持つていつも之に向つて進むの必要を説くのである」と述べられて居る、記者はつねに人生問題に關しては、現在に超越して無限の靈格に同化し、さらに立かへりて現實の世界に立働くものでなければ、人としての價値はないと信じて居るので、高島氏の卓識の所論には大に敬意を表して居る。

海外布教

日蓮宗佐野僧正は、六百五十年前の海外布教の先驅者たる日持上人の傳を編み之を公にせられた、其婉麗なる雄筆を振ふて能く日持上人の性格や大志を叙し、海外宣教の遠大なる壯圖を讚歎せられて居る、第九蒙古篇中の一節に云く、人も知る大元蒙古は北方支那に崛起して西は歐洲大陸を蹂躪し亞細亞大陸を席卷し餘勢我が神州を襲ふて來たけれども十萬の軍旅生還僅かに三人と云ふ有様であつた吾が日持上人はその後十五年單身孤影支那本部を中心にして北は滿洲蒙古の地南は遼東韓半島まで漂浪幾年南船北馬一意妙法の弘傳に力められたので

あるしかしその終焉のことはどうであつたか少しもわからないのであるあはれ末法萬年の闇を照すべき慧日本化の行者蓮華阿闍梨日持上人はその信仰を傳へんと努力せられつゝ終に異強絶域に其影を匿してしまはれたのである、あゝ海外宣教の宏圖を示された日持上人の靈格は偉大なるものである、上人は親から東洋大陸の山河を踏破して思想上の統一を圖られたのである、而かも宣教の即是道場に座して身讀法華の行者として其終焉を告げたのである、吾等は上人の壯烈宏遠なる靈蹟に觸れ、無前の幸榮に誇ると、もに感奮激勵して天職の遂行に努力せねばならぬ、眞に不借身命の聖訓を味讀し色讀せねばならぬ。

軍事と國民教育

大隈伯「後援」我々の軍隊は決して侵略的の軍隊ではない國家の威儀と利益とを保護する爲めの設備である即ち無道に對する正義の劍である日本は五千萬の人口を有する大帝國である露國は一億五千萬の人口を有するけれど其中には猶太人ありゴール人あり又獨逸は七千萬に近き人口を持つて居るけれども北にはポーランド、ヘルスタイン、スライスニク等の異種族がある南は其の大半舊教徒であつて多少ラテン化して其の統一困難なる國で

ある英國にしても、アングロサクソン人種は遙かに我日本民族よりも少数である而して米國は其國が龐大であり人口は一億萬に近いが米國はと難駭な國民はない而かも其の八分の一以上は黑人である日本の如く純潔にして統一同一民族を以て組織せられたる國家は世界に比びがない我國は世界有数の大帝國である同じ民族が同じ主權者の下に統一せられ過去數千年間の赫々たる歴史は國民教育と結び付いて民族的に發達した國家である此の光榮ある祖宗の遺業を繼いで軍事教育と國民教育と結び付け國民皆兵となつて崇高な主義によつて團結し萬世一系の皇室を戴いて、陛下の賜つた軍旗の下に働いたならば世界に於て必ず威敬せられる地位を有ることが出来る」と云ふ堂々たる大議論である、記者の如きは伯の人格識見等にはつねに敬意を表する一人である、然れども即ち軍事教育と國民教育とをいかに結び付けべきか、亦更に國民教育とは現在施設の教育制度にて足れりとするものなるか、具體的に形式を發表して欲しいと考へた、記者の見るところは、軍事教育は國民教育の一部であつて、軍隊は民族の本然的道德を涵養する一大學校であると信ずる、所謂國民の特性たる犧牲の精神はこの學校に於て練へあげら

勤勞である、物質界の原則を理解して之を應用したるは勤勞の結果である、故に人生の意義は勤勞に於て發見され得ると考へらるゝに至つた、勤勞は單に個人を利益するのみならず、結合すれば人類全體の協同を作り、現代のみならず過去及將來を結合して同一目的に向ひ連結せしむるものである、故に今日或事業は不可能であるも決して失望するに及ばぬ、他日必ず勤勞の結果之を成就することに至る望みがある、斯の如く人生は勤勞に依つて有望である、人生の意義は是に依つて明かに説明し得らるゝことと考へて居るのである、併しながら斯の如き解釋に依つて満足するには、吾人は自己の心靈的生活を犠牲にしなければならぬ、心靈的生活の統一を失はなければならぬ、併しながら吾人類は此心靈的生活の統一を犠牲にする事に依つて満足し能はざるのみならず、斯の如き事は不可能である」と論じ、更らに歩を進めて勤勞主義の弊を説て云く、
「近代に於ける過度の勤勞は諸方面に既に其の危険を表はして來た、生活問題のみならず、道德問題にも影響して其惡結果を示して來た、勤勞に熱中する結果、人は物質界を征服したが、其の心靈を失ふ危険に陥りつゝあるのである、又吾人類は單に勤勞の爲に勤勞

れる、それ故に男子は須らく體力を強壯にして置いて、一定の時機が來たならば進んで之に入學して努力奮勵の切磋を積み、遺憾なく特性を發揮せねばならぬ、されども國民性の發揮に就ては、今少しく根底に力の存するものがなければ、眞に犧牲の精神を練へ上げることがどうであるか、そこに宗教の力は必要ではあるまいか、固より宗教と云つても、國民性を啓發するに足るべき根本の教が確立して居らねば採用すべきではないが、其教は確かに在る、即ち日蓮上人の主義である教理である、記者は我田へ水を引くやうな偏見は持て居ない、誰れでも虚心恬懷の觀察眼を以て上人の主義を窺へば直ぐに解る、この點は實に重大事であるから忠實に調べなければならぬとおもふ、我々は祖先である歴史上の偉人日蓮の主義信條を研鑽するのは權利であつてまた幸榮ではないか。

心靈的生 活と勤勞

中島博士「教育學術界」——古代に於て人は避くべからざる運命として、奴隸の如く自然界の法則に服従したが、今日はその法を研究し、之を改良し、之を應用し、之を變形する方法を發見し、其他種々の問題及可能性を科學の研究に依つて知るに到つた、而して此新思想の中心的事實は

することを以て永久に満足し能はざるものである、何故に勤勞するのか其理由を知らずして、單に勤勞の爲に勤勞するものは駄獸である、人生の全體を益し能はざる勤勞は吾人を利するものでない、物質は全體としても人生の全部を活動せしむるに足らぬ、即ち宗教美術哲學の如き人生の心靈の方面は、今日の勤勞に熱中する結果却つて退歩しつゝある事明かなる事實である」と、眞に博士の所説の如くである、現代はあまりに勤勞に熱中し物質奴隸となつて居るものが多いので從て宗教を輕視して温かき情操を缺き、美術の價直を斥けて趣味なき生活を送り、哲學を迂遠なりとして向上の前途を塞いで居る、どうしても心靈的生活と勤勞とは衝突してはならぬ、此二者が併行し展開して行かないならば、ほんとに人生問題の解決は出来るものではないとおもふ、

愛と婦人の生命

九月の「女學世界」に田中穂積博士が婦人の生命問題を論じて居る、博士云く「女の生命は噂と愚痴とに生きてると云ふけれども其れは單に女の性格の一端を窺いて言つたに過ぎないで、女は矢張り愛情に生き、子供に生きてるのである愛情の荒み行く日、愛情の減り行く日、愛情に離れし

瞬間は、女子にとつては眞實なる生命ではなく生命の淡い影である、朦朧なる幻影である、精霊の宿つた生命ではない、仙人は雲を餐し霞を吸ひ、詩人は空想を喰つて生きてると云ふが女は愛情と子供に生きてるのである、女子の愛情、處女時代には戀愛となり、夫に對しては貞淑となり、子に對しては慈愛となるのである、故に女の生涯から愛情を引き去つたならば空虚である女は愛情を以て自己の生を充實せねばならぬ」と言つて居らるゝが「宅花園女史も、「婦人くらぶ」に現代の婦人は如何なる男子を要求するかと云ふ論題の下に、愛情のある男子でなければ、夫として生涯を送るべき大要件を缺いて居る旨を次の様に言つて居る、「夫の職業が全然自分の趣味に合はぬ様では、夫婦の間に圓滑を缺く様なことも起らぬとは限りませぬから、これは結婚する前に少し注意した方がよからうと思ひます、然れども愛の力さへ強ければ趣味の相違位は何方へでも同化することが出来ます、要は愛の一點にあらうと思ひます、そこで現代婦人は如何なる男子を夫とすれば善いかと申しますと、それは豫め標準を定めることは六ヶ敷いと思ひます、何故かと申しますに、女と申します者は、今日の世の中では結婚致しますにもどう

教 報

◎徒らに遊戯雜談のみして明かし暮さんものは法師の皮を着たる畜生也との叱咤警醒の大文字はわれ等の片時も忘れてはならぬ教訓であるいかに嚴霜烈日の苦痛を覺ゆる時があつてもつねに此の教訓を體して宣教の聖業をやめてはならぬ自己の力量の能ふ限りは熱誠以て事に當らねばならぬ

八月の東京教壇は稍や寂しかつたがさりとて一方には盛んに活動の歩を進めて居る「十二日」品川町妙國寺にて本多大僧正の懇ろなる信仰上の法話があつて聽衆は満足と法悦に充つるを得た「十三日」午後二時よりは品川妙蓮寺にて第二回養徳兒童會を開いた山根日東師は輕快流麗なる辨論を振つて處世の教訓を與へ淺尾氏の特志の模擬氷店は三百人前を供し餘興には圓旭堂の講談があつて會衆の兒童は嬉々として手を携へて遊び歸るを忘るゝほどの盛況であつた同會は笹川僧都の發起にて信徒は亦熱心に之が外護の責を盡して居らるゝので將來益々發展するは疑がないわれ等は斯かる會は兒童の品性を高め清新なる趣味を與ふる點に於て尤も

しても受動的でござりますから、進むで男子に接近して選擇すると言ふことは却々出来るものでござりますせん、何といたしましても女の結婚は運でござります運命の命する所に従ふて夫を持つのが今日の女の状態ですから、運命でどう言ふ夫を持たうも知れませぬ、ですから女はどう言ふ夫を持ちましても、一度夫としたる以上は、假令夫が如何なる人物であらうともよく調和して行くだけの素養を作つて置くのか何より肝要です、それを豫め標準を定めて置いて、若其標準に適ばない者であれば直ぐ離婚すると言ふ様な風になつたらばそれこそ世の中は滅茶々々です夫の思想が自分より進むで居れば、勉強して夫に追いつく様に心掛ければよし、又自分の思想が夫より進むで居るとしたならば、夫を引立て、同化さすればよいのです、要するに女は融通の利く様に修養して置かねばなりませぬ、女史の識見は公正で穩健である、淫靡浮薄の風に染みて、イカガがある現代の若き婦人は徒に前途の輕躁なる空想を夢みるをやめて、婦人としての素養を養つて置かねばならぬとおもふ、特に家庭道德の要義を心得て、優にやさしいいつも春風の颯と吹きさくる様な新家庭を作ることが大事であるほんとにそうせねばならぬ(白碧生)

良き施設であると信する「十五日」小石川雜司ヶ谷本教寺にて施餓鬼會を利用して三上義徹君は祖先崇拜と正しき法に信順するは我國民の誇りとしたる歴史を述べ信仰の大事なるを論じさきに人格修養通俗教育の旨趣により日蓮上人を紹介すべく統一節なるものを發明したる宇都宮主計之介氏の龍の口夜半の大刀風及び伊豆の伊東あまの浮岩の二節を演じ偉大なる人格の一面と辛酸の史實を傳へて多大の感興を與へた記者は藝術の力の大なるに驚へたそれは一場の講演によりて感極まりて泣かしむることは容易でないが藝術の魔力とも云ふべきものが一座悉く胸せまりて泣くものゝみであつた「二十日」淺草吉野町國明會にて第七例會を開いた大學林生吉永義彦氏の上人の偉大なる所以を紹介したる後笹川僧都は現代の病弊を指摘し進んで精神修養の怠るべからざるを説き日蓮主義の特長を述べて信仰に入るべきを誨へられたが回を重ねることに聽衆は熱心に聞く様になつた「二十七日」品川町本光寺にて正法護持會を開いて笹川僧都今成僧正の講演があつた笹川師一流の快辯と今成師の莊重なる論辯とは能く聽衆の信仰を啓發培養するに適切なる講話であつた(白碧生)

△千葉教報

◎尙風會 尙風會生れて千爰三年社會事業に關して特
に形式上の設備を爲すまでには至らないが屢々講演會
を公開して名士を招聘し地方の風教自治精神問題に關
して改善又は向上の進路を示し既に内務省に於ても天
下一品の風教改善の機關なりと稱せられつゝあるが本
年の夏期講演會は郡農會郡教育會と相合して開會する
に到りたのである同會設立當時は疑と侮りとを以て取
扱はれて居つたが時代の進運とは言ひ公團體と協同提
携して其目的を實行して進むことになつたのは寔に喜
ぶべきことである八月十三日より三日間東金町西福寺
に開く「十三日」石井幹事開會の辭を述べ久米法學士は
「地方民風の改善」なる題下に一時半の講演を爲し新
講談家鈴木水氏の木村長門の守及び親子二代の銘作
と義士傳中の忠僕直助の講談ありて八百の聽衆を酔は
しめ感興を惹くもの多かつた「十四日」加納子爵は「産
業に就て」と題して獨特の卓見を述べ牛村農學士は「農
政一斑」に就て農村民に適切有益なる説を吐き鶴澤法
學博士は「文明の意義」に關して各方面より之を詳論し
二時間に亘りて其意義を明かにし四百の聽衆は何れも
各講師の所説に感じ自己の職業と社會改善の事業とに

盡すべきを覺醒するものがあつた様である「十五日」海
鹽千葉中學校長は「家庭と教育」に就て其關係を述べ山
方千葉縣技師「肺結核豫防」と題して傳染豫防の注意や
衛生上の事項を指摘して公衆衛生の問題を論じ鈴木水
水氏は義士傳神崎與五郎の一節を語り文學博士中島力
造君は「日本將來の教育」と題して豊富にして卓越なる
識見を披瀝し小林法學博士經濟學者の立場より「地方
發展」に就て縱横無盡に意見を發表せられ終りに巴水
氏の長短槍の争の論講いと面白く斯くして三日間の講
演會も盛況のうち午後六時閉會を告げられた此日深
山郡視學鈴木農事庶務藤田校長市原教授能勢支會長廣
森幹事山岡本會幹事は八鶴館に晩餐會を開き胸襟を披
いて本會事業の將來を談じ所謂異體同心以てこの至難
なる社會教育の事業に努力すべきを約し一同歎を盡し
て散會を告げた

◎西上總君津郡に於ける顯本宗寺院住職は聯合布教會
を組織し飛山御園佐野師等幹部となり毎月聯合布教を
各寺に開いて信仰の啓蒙風教の革正に盡しつゝあるが
八月地方有志の希望により中村乾信師を聘して講演を
請ふことになつたこのたびの巡教中尤も好成绩を得た
るは飯野法性寺と佐貫町安樂寺の講演であつた飯野村

は妙宗信徒七十餘戸にして他は諸宗の所屬であるが村
吏及び名譽職の參聽は勿論小能高等小學校長は職員と
六百餘名の生徒を率へて參列せられた中村師は特に兒
童のため一場の精神訓話を爲して小さき胸に響きを與
ふるものがあつた亦佐貫町は客冬淨土宗傳道隊の來り
て日宗攻撃の鋒をむけたる所なれば日蓮主義の講演あ
りと聞くや同町共同會員青年會員重立等の來聽者堂に
溢るゝの盛況を呈し飛山佐野師の講演終了後中村師は
熱烈なる舌鋒を振ふて現代思潮を痛憤し淨土教の根底
に一大鐵錘を加へ宗教統一を絶叫して日蓮主義の本領
に論及するや滿堂の拍手急激の如く萬石の涼雨襟懷を
洗ふがごとくであつた講演を各地に聞くこと一周日に
及び何れも非常の盛況にて法雨の潤澤ありしを見うけ
られた終りに御園師の發起にて縣下の勝地鹿野山に清
遊を試み終了の式を挙げたいわれ等は随力弘通に勵
めよとの先哲の訓誡を奉じ益々奮勵して其分を盡すよ
り他意はないのである

んは日蓮主義の最高教義を説いて居るので熱心なる外
護者と新らしき信徒が殖へる中々盛んなものである
◎豊橋市と云へば愛知縣第二の都市である三十餘の寺
院があるされども日蓮宗はたつた妙圓寺一ヶ寺である
若し夫れ各宗を凌いで日蓮主義の發展を爲すには一流
の學識と抱負と熱誠とを具へて居るものでなければな
らぬ今春文學士國友日斌師赴任以來豊橋市の教界は確
かに一大變化を來した師は昨今沈黙の姿であるが而し
其不言の態度に於て著しき化力を持つて居る元來辨論
がいかにか巧妙であつても感化の實が擧がらないでは何
にもならぬ教家は時に時處位を辨へねばならぬ國友師
が數月の間に辨論を用へないで三十戸の新檀家を作つ
たことは注意すべきことである亦文書傳道の上から毎
月統一十七部を購ひ有力者に贈りて居るそれ故にこの
後師が猛然起て廣長舌を振ふの時あらば東三州の教界
を風靡して統一主義の凱歌を擧ぐることをあると信す
る(實見子)

△東海道教報

◎遠州見付に於ける教壇は山本布教師赴任以來華々と
して教線擴張の事に盡瘁し錫を中泉方面に飛ばして盛

△西都教報(八月)

◎「一日」妙滿寺にて川崎師の初心成佛の要義に就いて
法話あり「二日」上行寺にて金光師は日蓮主義と日本國

家との關係を述べ川崎師は信仰の目的を確立せざれば何の益もなしとして本尊の意義を説き「十九日」妙満寺五開盆會の法筵にて野老僧正の懇切なる經卷相承に對する講話あり次で同夜例會演說會を開き金光師の人類に因縁深き佛陀を紹介し銀井師は果報の意義に就いて詳細なる説明をなし川崎師は信仰上の三大要素を擧げて純正の信仰を勧め野老僧正は眞の教に憑らば國も人も皆共に救はれて向上し發展すべき旨を説き「二十三日」久遠寺に演說會を開き川崎師の本尊を擧げべき理由と本尊の尊とを説き銀井師は法華經の廣大なる利益を述べ金光師は佛陀が衆生救済の大慈悲より無量の力用をいだして活動し給ふ旨を懇示し各辨士の熱誠は能く聽衆の肺腑に徹底して日蓮主義の難有さを感ずるに到らしめたりと云ふ

●日蓮主義秋季大講習會開會の計畫はさきに京都聖祖門下同志會と京都天晴會と合同して十一月三日より五日間妙満寺講堂に開くべく兩會より委員を擧げて準備中なりと云ふ

●京都天晴會例會は九月一日午後七時より妙満寺講堂に於て兒童心理學の泰斗高島平三郎氏を聘して公開演說會を開く梅室幹事開會の辭を述べ高島氏は「人生過

武を尙ふの精神がなくてはならぬ多くの人は文明あるを知て武明あるを知らぬではなからうか一文ありて武なければ弱し」と古人も言つて居る日蓮上人は「攝受は文の如く拆伏は武の如し」と唱へて文武の精神を教へて居る」と説き更に歩を進めて徳性の美風を養ふべきを論じて日蓮主義の立脚を明かにし知事を始め官吏軍人吏員の一流の聽衆のみにて其効果は多大なるものがあつたに相違ないなほ岡山教壇の盛んなことは他に其比を見ない能仁師が精力主義なるには驚くべしだ例月十數回の講演と地方に飛錫しての活動振りは我教徒の模範とするに足ることに昨冬文書傳道の要を感じて自から雜誌日蓮を發刊しいつも優美なる體裁と豊富な資料とを以て充たされて居る日蓮主義者の一讀すべき好雜誌である (白碧生)

青森教信

●青森地明會は中村謙藏氏石村義和氏等の熱心なる指導と會員の求道心とは契合して尤も眞面目に上人の人格及主義を研鑽せられて居るが同會は一面研鑽の資料として一面には文書傳道の意義に於て毎月統一四十部宛を購ひ地方有力者に贈呈せられて居るこの北陸の地

程の典型としての日蓮上人」と題して上人の一生を三期に分ち準備時代と活動時代と老熟時代と爲し其準備時代中に於ける上人は清澄に鎌倉に或は叡山に高野に南都に遊んで佛教各宗の遺奥を極め其他和歌書等に至るまで實に血を吐いて研鑽せられたるは以て後人の手本とすべく又活動時代に於ては千百の迫害をうけつゝ、宣教の大業に従ふたる所他に其類を見ず而して晩年身延山に入りし上人は敢て世評の厭世隱退にあらず五十年に於ける事業を永遠に傳ふるがためにして身延九ヶ年は實に大成の期なりと云ふべく故にこの三期に分つて上人を見れば實に三千年唯一人の偉人なり今や日本は個人的にも社會的にも上人の如きを典型として學ぶべきなりと堂々一時間半に亘りて諭すが如く導くが如く簡易にして壯麗なる講説には三百の聽衆大満足を表し散會したるは九時半なりき

△岡山教信

●大日本武徳會岡山支部大會より八月十三日精神講話講師として僧正能仁事一師は招聘せられ「武明の徳性を發揮せよ」と云へる講題を掲げて師が獨特一流の風發の大論辨を振られた「凡そ國民は文を練ると同時に

に設けられたる形は小さな會であつても上人の人格に接觸して居る誠實なる居士の集りはいかに清く亦感ずべき美事があるではないかさればこの一事を思ふても教團に衣食して居る教徒は翻然夢より醒めて奮發せねばなるまいとおもふ (白碧生)

日蓮主義でなければ現代の要求を満足せしむることが出来ぬ、されば此際從來の購讀者諸賢はこの主義のために購讀者を勧誘して下さい

5

大僧正本多日生現下著

橘香集

特製皮金字入美本
金六拾錢
並製クロッ金字入
金貳拾錢(郵税貳錢)

本書は婦人のため起れる日蓮主義讃仰地明會のため特に本多大僧正が法華經の要文と尊とを聖訓とを輯めたるものなれば弟子檀那は必ず先づ之を拜讀し修養せざる可らずしかも本書はポケット式にて頗る携帯に便なれば敢て之を薦むる所以也

大僧正本多日生現下講述

法華經講演集

序説
如來壽量品

洋裝美本
正價五錢
郵税四錢

本書僅かに數十部を餘すのみ正價にて頒ちべし

東京市淺草區北清島町十四番地

發行所 統一團

(振替口座東京二二一九)

紺紙金泥の本尊會て第九十六號に報じたる如く何時にても御申越あらば迅速御送り致します

緊告

△本誌購讀料一ヶ年以上滞り候御仁は雜誌經營の事業を洞察せられ御送り下さる
本社はこの主義發展のために一段の奮發を爲し改良をも加へることなれば此際整理の必要に迫りて滞納誌料の送金を請ふ次第である

統一團會計部

勤行作法

一部代金五錢十部以上一割引郵税四部毎に金二錢三十錢以下五厘郵券代用不若
振替口座東京二二一九統一團宛

右は各派統一の理想の下に本多日生師の編纂せられたるものにして、勸請文、同向文の如き最も簡潔にして而も其要義を逸せず總振假名付なれば初心の行者の所用として最も適切なるもの也客月來願與の求めに應ずるを得ざりしも今回さらに印刷に付し製本出來致し一般信徒の爲めに之を願たんとす、御入用の方は前記代金を添へて御申込あらば御送可致候也。

發行所

東京市淺草區北清島町十四番地
妙教婦人會

明治四十四年九月十五日印刷發行

發行人 井村日成

編輯人 山根日東

印刷人 鈴木日雄

發行所

東京市淺草區北清島町十四番地
統一團

宮殿●須彌段 前机●幢幡 大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候



正價 三法堂佛具發賣目錄

注意

佛具と唱すれす此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價附發賣目錄を以て一々記載する能はず。諸君は、發賣附發賣目錄を以て一々記載する能はず。御覽あれ。寺院様方の御入用品一切の買物何程遠方でも坐な左の通り買物安價にて可き升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は

佛具卸部

京都市三條 本舖 三法堂藤田總次
通小橋四入

小賣部

同市三條 振替貯 大阪(四二五九) 金番銀 東京(二〇七七一) 通大橋四入 三法堂佛具陳列場

日本の國體と日蓮聖人

名一 王佛一乘論

上等クローズ美本、四六倍大形五百二十七頁◎定價金貳圓五拾錢、送料内地金拾八錢◎振替口座番號東京貳八六六

本書は日宗隨一の碩學清水梁山師が多年の蘊蓄を傾け一代の心血を注がれたるも、希有の一大著作なりとす若し其の三種神器の關係等は學界を動かすに足るの新説にて釋尊の祖は日本人識驚くの外なし實に數百年間未だ曾つて一日本國體の真相は本書に於て方めて發揮せられ、日蓮聖人たびも顯れざるの王佛一乘論は茲に正さに新曙光を放たれぬ、世の政治家讀むべく、教育家讀むべく、一般國民亦須らく襟を正して讀むべし、特に日蓮聖人の末流に在りては僧俗を問はず必ず本書を指南として以て現代思潮の救済に資すべし、嗚呼方今政教の大事豈本書の旨に過ぐる者あらむや。

發行處

名古屋市東區高岳町二丁目

慈龍窟

(振替口座番號)「東京二八六六」(電話番號)「三四一九」

統一

號百二第

日蓮上人の苦樂に對する見地

大僧 正小林 日至師

國家と軍人と日蓮上人

海軍大佐 佐藤鐵太郎君

佐渡の靈蹟

帝國大學史料編纂委員 鷲尾順敬君

佛教統一と日蓮上人

顯本法華宗大學林長 今成乾隨師

